

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成30年3月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 ウイルス・再生医科学研究所

職 名・学 年 准 教 授

氏 名 宮 崎 正 輝

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	キーストンカンファレンス Keystone Symposia Conference, Immunological Memory: Innate, Adaptive and Beyond	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	The E-Id Protein Axis Orchestrates the Cell Lineage Choice of Adaptive versus Innate Lymphoid Cells.	
開催場所	アメリカ合衆国 ハイアットリージェンシーオースティン	
渡航期間	平成 30年 2月 23日 ～ 平成 30年 3月 7日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	学会参加費 99,907円
		渡航費・滞在費 150,093円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団からの国際学会研究発表の助成を頂き、大変感謝しております。日本では滅多に会うことのできない海外の研究者達の発表を聞いたり、フロアでの質問や議論など、充実した学会を過ごすことができました。研究費に限りがあり、海外の学会に参加することを躊躇うことも多いですが、そういう意味でも貴財団の助成金を頂き、積極的に国際学会に参加して最新の情報を手に入れたり、国際交流やその先の国際共同研究に繋げる機会をいただけたことは、大変有り難いと思います。	

成 果 の 概 要

ウイルス・再生医科学研究所 宮崎正輝

まずは今回の国際研究集会発表の助成を頂き、深く感謝を致します。Keystone Symposium Conference, Immunological Memory: Innate, Adaptive and Beyond は、アメリカテキサス州オースチンで開催されました。アメリカを中心に多くの参加者が集い、大ホールが満員になっており、非常に熱気に溢れておりました。発表も、シンポジウムが主体のため各演者30分の発表時間があり、大きな流れの中での発表を聞けたので、大変勉強になりました。また、最新のデータの発表が多く、質疑応答の時間が長時間に渡ることもしばしばあり、日本の学会との違いを感じました。また若いポストクの参加も多く、熱心に質問している姿を見かけました。また今回は、Longitudinal Studies on Aging and Immunity との共同開催ということもあり、午前中は、共同シンポジウムでもあり、大変興味深い発表が多かったように思います。

シンポジウムは、CD8T 細胞、CD4T 細胞の感染免疫やワクチン反応、そしてそのメモリー反応が主体であった。その他にも、NK 細胞のメモリー (UCSF, Lewis Lanier) や、Immunometabolism (Erica Pearce, Max Plank) などの発表もあり、免疫学として幅広い考え方を持つことができた。CD8T 細胞に関しては、組織局在のメモリーCD8T 細胞 (tissue-resident T cell) の話が多く、特に UCSD の Ananda Goldrath の発表は、最近 Nature に報告されたこともあり、大変注目を集めていた。また Stanford 大学の Bali Pulendran の発表では、腸管の microbiome がワクチン反応でのメモリーに影響を与えることを、人とマウスの両方で示しており、大変興味深い発表であった。多くの大御所たちの発表があり大変感銘を受けたが、個人的に最も印象深かったのは、NIAID の Ronald Germain の発表であった。Histocytometry と two-photon microscopy を組み合わせて、生体内で一体何が起きているのかを明らかにする手法は、非常に説得力があった。また、“自分たちが見ている情報は、一部分にすぎない！”という言葉からは、研究者としての探究心の大切さを教えられたように感じた。

会場内では、至る所で議論が行われていたが、coffee break の間に何人かの発表者を捕まえて、フロアでは聞けなかった自分の質問を聞けたことは良かった。しかし、印象深い発表の後は、発表者の周囲は質問の列が途切れることはなく、残念ながら個人的な質問ができないことも多々あり、若い大学院生やポストクの熱意に追い出されることもあった。こうした光景は日本の学会では稀であり、もう少し日本の大学院生・ポストクも見習うべきだと感じた。

学会前には、テキサス州ダラスにある Baylor Research 研究所の Yin C. Lin とデータの共有、議論を行い、今後の共同研究の方向性を話し合うことができた。また学会後は、San Diego へ行き、UC San Diego や La Jolla 研究所の かつての共同研究者や他のラボの PI たちと色々な情報交換を行い、日本ではなかなか得ることのできない、今後の研究を推進する上での助言も頂いた。

日本の中では、世界の潮流がどこに向かっているのかわからないことが多い。確かに海外と同じことをしても仕方がないが、新しいアイデア・方向性などをちゃんと把握しておくことは、研究という競争の中では必須のことであると感じる。そのためにも、定期的に海外の最前線の学術集会に参加し、発表を聞いて国際交流をすることは非常に重要であると考えます。そういう観点からも、今回、助成金を頂き参加できたことは今後の自分の研究を考える上で、非常に貴重な機会となりました。改めて感謝申し上げます。